ハワイ英語で使われる日本語起源借用語
—話者属性による使用状況および音韻論的特徴について—

ダニエル　ロング・髙城　隆一

1.　はじめに

ハワイにおける日本語関連の研究論文は数多く刊行されている。それらは「ハワイの日本語」に注目したものと、日系人が話すハワイ英語を分析したものに大きく別けることができる。前者に関していえば、朝日・ロング 2011 で談話における方言的特徴を分析し、文献をリストアップしている。また後者に関していえば、ロング他 2015 でハワイ英語における日本語起源借用語（JOL=Japanese origin loanwords）の分析を行ない、同様先行研究のリストを提示している。しかし、JOL の実際の音声学的（音韻論的）特徴に注目した研究やその社会言語学的使用状況に焦点を当てた研究はこれまで少なかった（使用に関する数少ない研究例として島田 2006、島田他 2014、ハナシロ・島田 2011、Fukuzawa・Hiramoto 2004 を参照されたい）。

本稿ではハワイ英語 JOL の音声および使用状況に注目する。2018 年 9 月に現地ハワイで行った聞き取り調査および文献調査で分かった新な事実について考察する。まずは、shimpai（見合い結婚）と bobura（かぼちゃ、日本から来た日本人）という二つの語に注目する。次に、ハワイ英語で使われる JOL の 70 項目に注目して、話者の属性（ハワイ出身かどうか）による使用状況について分析を行なう。さらに、日系 3 世話者への調査に基づいて、ハワイ英語 JOL にみられるいくつかの音韻論的特徴について考察し、その音韻体系を明らかにすることを目的とする。

なお、本稿で言う「ハワイ英語」は Carr(1972)などに従い、ハワイで使われている変種の連続体(continuum)として扱う。すなわち、接触言語の特徴が色濃く残っているハワイクレオール英語という下位変種(basilect)から、「ハワイ標準英語」という上位変種(acrolect)までの幅広い変種の総称として用いる。

2.　日本の方言に由来するハワイ英語の借用語

ハワイ英語 JOL は、いわゆる標準日本語に起源語を持つものだけではない。移民としてハワイに渡った日本語話者の出身地域は、福岡・広島・山口などの西日本各地を中心に多岐にわたっており、当然、その母方言も一様ではなかった。本節では、標準日本語以外の日本語に由来すると考えられるハワイ英語 JOL の 2 語に関する新たな情報が入手できたのでそれを紹介する。ハワイ英語において shimpai は「お見合い」の意味で、bobura は「日本人」の意味でそれぞれは使われている。両方はこれまでの文献に取り上げられてきたが、2018 年 9 月にロングと髙城がハワイに渡り現地の日系人への聞き取り調査およびハワイ大学 Hamilton 図書館で文献調査を行なった際に新な事実が発掘できた。以下でそれを概説する。

2.1. **shimpai**

ハワイ英語において「お見合い」の意味で shimpai が使われていることは今までの研究で知られていたが、文献調査によってその意味合いや使用実態がより明確になってきた。そして日本諸方言におけるこの単語のルーツが明らかになったのである。

語形は標準日本語の「心配」と同じであるが、意味は標準日本語のものとは異なる。ハワイ英語においては「結婚相手を探してあげる」というような意味で用いられている。さらに、shimpai marriage「お見合い結婚」という日英語混合の複合語としても文献に登場する。下記に引用するのは 1948 年発売の『Social Process in Hawaii』XII に掲載されていた記事の一部である。

His was not a pure shimpai or match-made marriage, nor was it a pure love-marriage. It was a combination of the two. My brother first met his wife through a baikainin but after that the decision was left up to them whether or not they wanted to get married. Thereupon the baikainins arranged all the details of the marriage with the parents of both sides... My sister's was a love-marriage but there were still traces of shimpai marriage.

（下線は引用者による。）

ここでは、shimpai marriage が match-made marriage の意味で用いられ、love-marriage と対立する概念であると認識されていることが確認できる。また、shimpai marriage の他、baikainin(s)「媒酌人、仲人」という JOL も確認できる。

ハワイ大学にも所蔵されている『Nisei』という雑誌の第 9 号(Kubojiri 1955)や、Dennis M. Ogawa(1978)でも、shimpai marriage について知ることができる。下記の引用は Ogawa(1978)からのものである。

In Hawaii, arranged marriages, through the efforts of a middleman or marriage go-between, were called shimpai. The shimpai marriage was an outgrowth of the Japanese tradition of baishaku-kekkon, the nakodo system or the miai marriage. (page 416)

The guests had come into the living room. She wondered who the young man with them could be. As she listened to the words, she understood the nature of their visit. "Shimpai!" That's what they called this kind of match marriage. (page 430)

いずれにしても、上述の通り標準日本語の「心配」はこのような意味では用いられない。この語自体が JOL であることは明らかであろうが、その表す意味については、借用前に日本国内で意味変化が生じていたのか、ハワイ英語に取り入れられてから意味変化が生じたのかが、これまで不明であった。そこで今回、日本国内の諸方言を調べてみたところ、島根県と長崎県で「心配人」という語が「媒酌人、仲人」という意味で使用されているという記述に辿り着いた（徳川宗賢、佐藤亮一 1989:上巻 1204）。また、国内

の複数地点において「就職の心配をする／してもらった」のような用法がみられた（平山他編 1992: 第一巻 2543-2546）。さらに、多数の琉球諸語において標準日本語の「心配」の意味で、標準日本語の「世話」に相当する語形が用いられていることが分かった（同上）。

上記の辞書の記述は比較的新しく、ハワイに shimpai という語が伝わる前に意味変化が生じていたことを直接的に示すものではない。しかし、本稿ではこれらの記述が、「心配」から「世話をする、斡旋する」への意味変化が日本の一部の地域において生じた後に、ハワイに伝わった可能性を少なくとも示唆していると考えられることを指摘する。また、仮にそうではなく、この意味変化がハワイにおいて生じていたとしても、その変化の「種」は既に日本時代から存在していたということは、上記の辞書の記述からも読み取れると考えている。

2. 2. bobura/ bobora

ロング他(2015)では、bobura が「日本本国から来た日本人（すなわち日系アメリカ人でない人）のことを指す語」として紹介されており、その命名理由は「日本本国から来た日本人の頭がかぼちゃに似ていたから」であるとされている。この bobura という形は Densho Encyclopedia (2018)、Tonouchi (2005:10)、Sakoda & Siegel (2003:110)、Kimura (1988:31-32)に登場する。

国立国語研究所の『日本言語地図』第 4 集を見ると、標準日本語の「かぼちゃ」を意味する語として、「ボ（ー）ブラ」ないし「ボ（ー）ボラ」が九州西部から山口県にかけて多数分布していることが確認できる（図 1）。

bobura や bobora に英語の head をつけて bobura head や bobora head とした例も見つかっている。これらの語はポルトガル語の *abóbora* が日本語（主に西日本方言）に借用され、そこからさらにハワイに伝わったとされており（ロング他 2015）、観光客を含む、日本本国から来た日本人を小ばかにする言い方であるという。

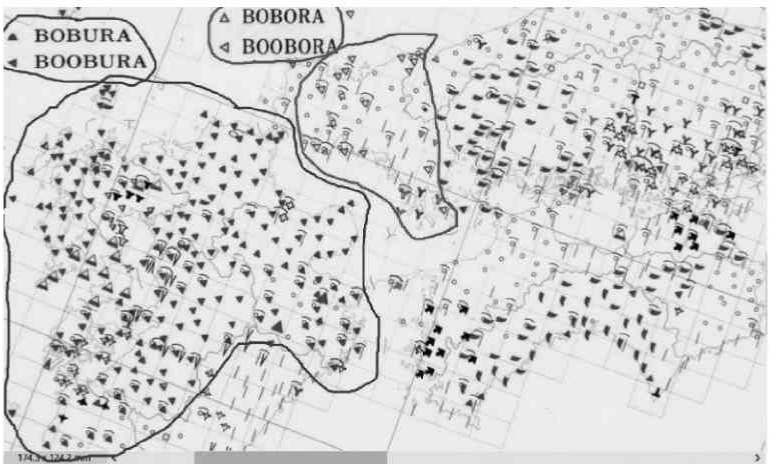

図 1　「ボ（ー）ブラ」と「ボ（ー）ボラ」の西日本における分布

本節では、ハワイに借用語として伝わった日本語のうち、標準日本語以外に由来すると考えられる代表的な2例を紹介した。この他にも、魚の名前などに西日本方言から借用されたと考えられるJOLがいくつか見つかっているが、それらに関しては稿を改めて論じたい。なお本稿では以下、特に断りのない限り「日本語」という語を「標準日本語」の意味で用いる。

3. 話者の属性と使用状況

この節では、いくつかのJOLの使用状況と話者の属性との関係について考察する。2018年9月18日にハワイ大学の学生17名を対象に、「ハワイ英語における日本語起源借用語」とされる70語に関する調査を実施した。17名の調査対象者のうち、約半数（9人）がハワイ出身者であり、残りの約半数（8人）が、アメリカ本土や外国などハワイ以外の地域の出身者（以下、他地域出身者）であった。表1に示す通り、今回調査した日本語起源借用語70語のうち、ハワイ出身者が「聞くことがある」と回答したのは8〜26語であり、平均すると19.6語であった。それに対し、他地域出身者が「聞くことがある」と回答した語は2〜10語であり、平均すると5.75語であった。事前の予想通り、ハワイ出身者は他地域出身者に比べて、多くの日本語起源借用語を耳にしたことがある傾向が高いことが分かった。なお、以下の単語別の考察では、出身地別の分析はしない。

表1　日本語起源借用語を「聞くことがある」語数と平均

	「聞くことがある」	平均
ハワイ出身者8人	8〜26語／70語	19.6語／70語（28.0%）
他地域出身者9人	2〜10語／70語	5.75語／70語（8.2%）

当然ながら、「日本語起源借用語」と一言でいっても、認知度は一様ではない。17名の調査対象者の中で認知度が特に高いものとしては、*banzai*（万歳）、*chicken skin*（鳥肌）、*go shishi*（小便する）、*ume*（梅干し）、*andangi*（サーターアンダギー）があることが分かった。このうち、*andangi*は沖縄起源である。この語は、日本国内の他地域においては、それほど広く知られているわけではない。東京よりハワイでよく用いられているとしたら興味深い。

回答者の約半数が知っているとした語には*buddah head*（ハワイ日系人＝米国本土日系人が使うことば）、*obachan*, *baba*（祖母、年配の女性）、*ojichan*, *ojiichan*（祖父、年配の男性）、*arigats*（ありがとう）、bon dance（盆踊り）、*baka*（馬鹿）、*bachi*（罰）、*atsui*（暑い、熱い）があった。

あまり知られていないという結果が出た語は*basan*, *baachan*, *bachan*, *baban*（祖母、年配の女性）、*oji*（祖父、年配の男性）、*cho-cho lips*（たらこ唇）、*hanabata days*（幼少期）、*hanabata*（鼻水）、*mempachi* eyes（大きな目）、*ogo*（海苔）、*bakatare*（馬鹿たれ）、*bocha*（浴槽）、*obake*（お化け）、*gullagulla*（痰）である。

調査して驚いたのは*zoris*（草履）であった。調査する前に知名度100%に近いと思っていたが、「知っている」とした回答が予想に反して1つしか無かった。むしろ多くの回答者が「サンダル」を意味する*slippahs*になじみがあることが分かった。

既に挙げた通り、「おばあちゃん」と「おばちゃん」、「おじいちゃん」と「おじちゃん」のように、母音の長短で区別される単語がハワイ英語で借用されている。一般に、アメリカ本土英語の諸方言では母音の長短が弁別的でないが、ハワイ英語は果たしてどうだろうか。今回の調査では、ハワイ英語においても長短の区別が失われていることを作業仮説にしていた。結論は複雑であった。Bachan と Baachan、Jichan と Jiichan といった限られた語に関して、母音の長短による区別が日系人に残っていることがこれまでの聞き取りで分かっている（ロング他2015:147）。しかし、日系人以外の人には長短の区別が残っていないことが今回の調査で分かった。その代わりに、別の手段によって似た語の使い分けが新たに生じているという傾向がみられた。完全に区別されているわけではないものの、*obachan*が「祖母」、*baba*が「年配の女性」の意味でそれぞれ用いられる傾向が高いことが分かった。同様に、*ojichan*は「祖父」、*oji*は「年配の男性」の意味で用いられる傾向がそれぞれ高いことも分かった（表2）。なお、日本国内の日本語では母音の長短によって、自己より二つ上の世代の「ばあ・じい」系の語彙と、一つ上の世代（親の兄弟）の「おば・おじ」系の語彙が区別される。この区別を保っているハワイ日系人がいるものの、ハワイ英語に広く残るのは前者のみであり、後者（英語で言う aunt, uncle に当たる日本語）はJOLとして使われていないのが現状である。

表2　ハワイ英語における日本語起源借用語の語形統合と意味分岐

起源語	母音の長短の区別が失われた借用語	ハワイ英語での意味（傾向）
おばあちゃん	*obachan*	祖母
おばちゃん		
ばあば	*baba, baban*	年配の女性
ばば		
おじいちゃん	*ojichan*	祖父
おじちゃん		
おじい	*oji*	年配の男性
おじ		

これにより、ハワイ英語では、日本語からの借用語においても、母音の長短の区別が失われつつあることが分かった。さらに、統合された語が、起源語とは異なる意味領域を獲得し始めており、意味分岐が生じていることが明らかになった。

4. 音韻論的特徴

この節では、ハワイ英語で使われる JOL の音韻論的特徴について解説する。2018 年 9 月 21 日、ハワイ大学で「ピジン」（ハワイクレオール）に関する授業を担当している Kent Sakoda の協力を得て、ハワイ英語で使用される JOL304 語を録音した。日系三世の Sakoda 氏は Kaua'i 島の Hanapēpē 町に生まれ、1950-60 年代をそこで過ごしている。Hawai'i 島の高校、そして米国本土の大学を卒業した後、大学院のため Oahu 島に移り住んで現在に至っている。Sakoda はハワイクレオール英語研究の第一人者であり、著書には Pidgin Grammar: An Introduction to the Creole Language of Hawaii（共著）などがある。録音調査の場所はハワイ大学 Center for Language and Technology の録音スタジオである。

以下ではハワイ英語の JOL にみられるいくつかの音韻論的な課題を取り上げて、Sakoda 氏の発音（場合によってはそれ以外の情報）を基に検討を行なう。まずは子音の発音に注目して(1)「フ」の子音、 (2)ラ行子音、 (3)ガ行子音、(4)タ行子音の語中の弾き音化、(5)「ツ」の発音と音節境界を考察する。次に母音に注目して (6)「ブ」と「ボ」の混交、(7)語末エ段母音の音配列規則による変化、(8)母音の無声化を考える。最後に特殊拍の問題として(9)促音の有無と(10)母音長短の区別、を分析する。なお、超分節的特徴や音節構造の特徴を、紙幅のために本稿で取り上げないことにしているが、今後これの観点から英語と日本語の接触を追究したい。すなわち、基本的には強弱アクセントを持つハワイ英語の JOL への、高低アクセントの影響について考察したい。また、ハワイ英語は音節構造になっているが、モーラ単位の影響についても今後検討したい。

4.1. 「フ」の子音

日本語の「フ」をローマ字で"f"と表記するが、日本語の「フ」は両唇摩擦音[ɸ]であるのに対して、英語の/f/は唇歯摩擦音[f]である。さて、問題はハワイ英語の JOL で使われる子音はどれかということである。結論から言うと、今回分かったのは、日本語の「フ」はハワイ英語の JOL になると[ɸ]ではなく、[f]のように発音される。今回の録音調査で発音してもらった *fugu*['fu gu]（ふぐ）は明らかに唇歯音である。他に *fukugi*（フクギ）や *fukusa*（袱紗寿司）、*furikake*（ふりかけ）、*furo*（風呂）、*futomaki*（太巻き）、*tofu*（豆腐）にも[f]が確認できた。また、英語起源の faifofo（小便する）もやはり[fai fɔ fɔ]と発音される。この語は複雑な言葉の遊び心がみられる英語・日本語混交形に由来する。その成り立ちは、まず、「go しいしい」（小便しに行く）という表現を「五四四」と読み換えて、さらにこれを標準英語の「five four four」に当たるハワイクレオール英語の（語末子音が脱落した発音）"fai fo fo"で発音している。

4.2. ラ行子音

日本語の「油揚げ」に由来するハワイ英語の aburage は[aburage]の"r"音は一般アメリカ英語のような歯茎接近音[ɹ]ではなく、日本語の弾き音[ɾ]として発音されている。一般アメリカ英語にも弾き音[ɾ]は母音間/t/や/d/の異音として現れ、アメリカ英語の多くの変種において"rider"と"writer"は同音語[ɹaiɾɚ]と発音される。しかし、これらの変種で改まった発音となると、

それぞれ[ɹaidə]と[ɹaitə]となり区別される。一般アメリカ英語においてもハワイ英語においても弾き音[ɾ]という発音は存在するが、前者においてそれが単なる異音となっているのに対して、後者では独立した音素となっている。この点は大きく異なっており、ハワイ英語の音素目録そのものが一般アメリカ英語のそれと異なることをも意味している。

一般アメリカ英語ならば上記のように弾き音化が予想される ajinomoto[adʒinomoto]（味の素）や buta tama [butatama]「豚肉のお好み焼き」はハワイ英語では語中の[t]が歯茎破裂音のままで発音される（「4.4. タ行子音の語中の弾き音化」参照）。

ハワイ英語 JOL のラ行子音は、歯茎接近音[ɹ]ではなく弾き音[ɾ]として発音されることを強調するために、表記を様々に工夫している。例えば Pidgin to da Max という本では、綴り字“r”に対応する発音を表す際には“d”を使用している。例として、“giri-giri” (giddy GIDDY)「旋毛、くせ毛」、“karai” (ka DIE)「辛い」、“bakatare” (bah kah TAH deh)「馬鹿たれ」、“bobura” (BO boo dah)（ボーブラ＝かぼちゃ→日本生まれ育ちの人を軽視した言い方）などが挙げられる（本の中では、大文字でアクセントの位置を示している）。Sakoda&Siegel の表記法では JOL の弾き音に大文字の D を使って次のように説明している。Here we'll use a capital 'D' to show this sound. It's found in some Pidgin words of Japanese origin, such as kaDai ‘spicy hot’ or kaDate ‘karate’. (2003:21)。今回の調査語彙のうち、語頭の“renkon”「蓮根」にも語中・語末の“warabi”「蕨」、“teriyaki”「てりやき」、“shiru”「汁」、“oshare”「お洒落」、“maguro”「鮪」のすべてに弾き音[ɾ]の使用が確認できた。

4.3. ガ行子音

ハワイ英語の JOL には、いわゆるガ行鼻濁音[ŋ]がみられない。これは、一般アメリカ英語の影響で消滅したのではなく、そもそも日本から伝わっていないからであると考えられる。確かに、100 年前の東京方言などでは鼻濁音が著しく用いられていたとされている。しかし、ハワイにおける日本語の基盤となったのは、福岡・山口・広島の各方言であり、これらの方言には鼻濁音が存在していなかった（平山 1992）。そのため、東京方言を含む一部の日本語方言でみられるガ行鼻濁音は、ハワイには伝わっておらず、今回調査したハワイ英語の JOL にもみられなかったのだと考えられる。

実際の調査でも、“aburage”や“andagi”などに含まれる/g/は[aburage]や[andagi]のように[g]で実現し、鼻音化はしていなかった。さらに、“arigatou”「ありがとう」、“nigiri”「握り寿司」、“uguisu”「うぐいす」、“omiyage”「お土産」、“mazegohan”「混ぜご飯」などに含まれる/g/も同様に、[ŋ]ではなく[g]で発音されていることを確認した。

4.4. タ行子音の語中の弾き音化

前述のように、アメリカ英語のカジュアルな発音では、母音に挟まれた歯茎破裂音/t/, /d/は弾き音化するという現象が広くみられる。ハワイ英語の JOL の中には、この影響を受けずに/t/本来の歯茎破裂音を保っている単語がある。“geta”「下駄」は[ˈge tʰa]であり、母音間の/t/であっても、"writer" [ɹaiɾə]や "get a job" [gɛɾadʒab]（仕事を探せ）のように弾き音化しない。すなわち、後者の単語は"geta job" [getʰadʒab]（下駄の仕事）と同音にはな

らない。

ハワイ英語では hanabata days という表現がよく使われる。歌謡曲のタイトルにも、政治家が再選活動のテレビ CM でも使っている表現である[1]。意味は「幼年期」であり、語源は日本語の「鼻」と英語「butter」の混合形で、「バターのようなとろとろした鼻水を垂らす少年」のイメージに由来する。hanabata days の発音は[ha na ba ɾa deiz]となり、アメリカ英語の音韻現象に従って、母音間の歯茎破裂音が弾き音化する。インフォーマントはこの単語と hanabata（単独語）の両方を 2 回ずつ発音しているが、いずれも [ha na ba ta]のような発音は実現しなかった。

Buddha head [buda hɛd]は一般話者の頭の中で、buta-head とも結びついている。Buddha-head は「仏陀の頭」ではなく、buta-head「豚の頭」に由来するという民間語源説がある。このように[t]と[d]が関係する（交代する）のは日本語の清音と濁音の関係である。ということを考えると、buddha と buta が交代しているのであれば、それは日本語が媒介になっていると考えられる。ところで、Buddha-head と buta-head が英語において、混同される一つの可能性は、両方が（一般英語でよく起きるような）「弾き音化」を起こしたときである（上記の§4.2 参照）。実は Bula-head という変異形も存在する。これは buddha-head の語中歯茎破裂音/d/が弾き音[ɾ]として発音されているという証拠である。すなわち、音声学の専門的知識のない話者が[ɾ]を表す文字として、歯茎接近音[ɹ]として発音されてしまいそうな“r”を拒否し、“l”の綴りを選択していると思われる。

4.5. 「ツ」の発音と音節境界

ハワイ英語の JOL において、日本語の「つ」に由来する発音は基本的に[tsu]として保たれている。今回の Kent Sakoda の録音調査では、語頭の[tsu]は日本語らしく発音されていることが確認できた。すなわち、「津波」を表す“tsunami” [tsu.na.mi]や「ツブ貝、アマオブネガイ」を意味する“tsubu” [tsu.bu]、「漬け物」の “tsukemono” [tske.mo.no]などの語頭の[ts]は[s]にならず、破擦音のままで発音されている。語中の「ツ」はどうであろうか。“apurupantsu”「カバーオール」が[a.pu.ru.ˈpan.tsu]と発音されており、日本語の/tsu/という破擦音が保たれている実態が確認できた。同じように“atsui”「暑い、熱い、セクシー」においても、[a.tsu.i]の発音となっていた。

「ツ」が入っている日本語起源借用語の発音は、ハワイ英語と一般アメリカ英語では異なるのである。Long 2016 で示したように、一般アメリカ英語においては、“tsunami”の語頭に摩擦音の[s]が使われて、[sunami]となるが、ハワイ英語話者の発音では、語頭の破

---

[1] ハワイのミュージシャン Dave Dunaway と Albert "Baba" Akiona からなるバンド Imua の 1998 年の曲 Hana Butta Days は https://www.youtube.com/watch?v=9pJb53CHuZI で聞ける。ホノルルの Mufi Hannemann 市長が hanabata days という表現を使う再選活動 CM は http://www.youtube.com/watch?v=OD4dNeFB3qU でみられる。現在の情報化時代において、こうしたインターネット上の情報は地球上のどこからでもアクセスできるのは便利である。しかし、情報が多すぎて整理が付かないため、自分の研究テーマと関連する情報を見つけるには困難な時代でもある。これらの動画の存在を知ったのも現地調査がきっかけである。情報化時代にも地道なフィールドワークの不可欠さを改め感じさせる出来事である。

擦音がはっきりと表れて[tsunami]となる。一般アメリカ英語の音配列規則によって、語頭に[ts]が立たないことは知られているが、ハワイ英語にはこうした規則がない。

一般アメリカ英語において“ts”で始まる語の借用方法は、借用元の言語によってそれぞれ異なる。日本語起源の“tsunami”は無声歯茎摩擦音[s]となるが、ロシア語起源の“tsar”（ツァール）は有声歯茎摩擦音を用いた[zar]となり、バンツー語起源の“tsetse fly”は[ttt.sɪ.flaɪ]や[tɛt.sɪ.flaɪ]のように、語頭の子音を無声歯茎破裂音の[t]に置き換えている。[ts]が語中に現れる場合は、音節境界を変え、「ごまかした発音」（Trudgill 1986 の言う fudging）を使うことで原音に近い音を再現している。上で見た、バンツー語起源借用語でも[tse.tse]という語の音節境界を変更し、[ttt.sɪ]として発音している。

ハワイには一般アメリカ英語の諸変種が母語となっている米国本土からの移住者も住んでいるが、彼らの間でこの JOL の[tsu]はどのように扱われるのであろうか。大衆向けの（言語学者の専門書ではない）本に興味深い記述がみられる。結論から言うと、上記の「ごまかした発音」がみられる。これが“atsui”にみられる。アメリカ本土の話者が発音しても、[atsui]のように日本語らしく聞こえるが、音節認識が日本語と異なるのである。Pidgin to da Max Hana Hou と言う本は米国本土からの観光客を対象にしたハワイクレオール英語の漫画付き解説書である。そこに“atsui”が「暑い、セクシー」という意味で提示されている。素人向けなので発音を表すのに国際音声記号は使っていない。その中で、“atsui”の発音が「ot SOO ee」と表示されており、IPA で書けば[at.ˈsu.i]のつもりだと思われる。一般アメリカ英語において「音節頭に tsu が来てはいけない」という音配列規則が存在するが、[at.su.i]のように音節境界をずらすことで「ごました発音」になり、ハワイ英語の[a.tsu.i]とさほど変わらない発音ができるのである。

単語によって語中の“ts”が/s/に変化することもある。同じ米国本土観光客向けの Pidgin to da Max という本に“apurupantsu”「カバーオール」という項目が載っている。発音表記が「ah poo doo PONCE oo」となっており、[a.pu.ru.ˈpans.u]を表そうとしていると思われる（3.2.で説明したように、ハワイ英語 JOL はラ行子音を歯茎接近音[ɹ]ではなく弾き音[ɾ]として発音しており、この本ではその弾き音を“d”で表している）。この本の著者は米国本土（ネブラスカ州）の出身ということもあり、語中でも音節頭の[tsu]が[su]に聞こえた状況を反映していると思われる。

4. 6. 「ブ」と「ボ」の混交

ハワイ英語では日本語の「かまぼこ」に由来する単語には kamaboko と kamabuko の変異がみられる。ハワイで出版されている 2 種類のピジン辞典 Pidgin to da Max と Da Kine Dictionary にもハワイ食文化に関する Pupus to da Max にも kamaboko という綴りしか出てこない。一方、今回のインフォーマント Kent Sakoda 氏に kamaboko という綴りを見ながらも発音が明らかに[ka ma ˈbu ko]のように最初の“o”が[u]になっていた。

ハワイ英語では kamabuko という綴りもみられる。インターネット上でもこの傾向を観察することができる。自称「移住したハワイ住民」の食べ物ブログ（An Ex-Pat Kama'aina explores food in San Diego and points beyond）では「かまぼこ」が 3 回 “kamabuko”という

綴りで出てくる(Kurashige 2005 年 5 月 27 日 ; 8 月 1 日 ; 10 月 19 日)。また、ハワイの出版社 Bess Press から出ている Pupus Plus（pupu はハワイ語で「食べもの」）という料理本にも kamabuko という単語が登場する。1 ヵ所のみであればミスプリントの可能性も考えなければならないが、3 か所（Fukuda 2004: 56 頁に 2 回、58 頁に 1 回）確認したが、kamaboko という綴りは 1 回もみられない。ハワイ英語における kamaboko と kamabuko の変異は、上記で見た bobora と bobura の変異と関係があるかもしれない。一般英語において、母音の通時的変化や地理的変異が激しいが、boko から buko への変化には英語が関与しているかどうは現時点では不明である。

4. 7.　語末のエ段母音の音配列規則による変化

一般アメリカ英語には、語末に[e]が立たないという音配列規則が存在する。但し、ストレス（強弱アクセント）が最後の音節に置かれている場合や 1 音節語の場合は例外であり、play, risqué [ris ˈkeɪ], cliché [klɪ ˈʃeɪ/], soufflé [su ˈfleɪ]などでは語末に[eɪ]が現れる。この音配列規則が存在するために、「空手」は一般アメリカ英語では語末の母音を[e]から[i]に変化させて[kə ˈra di]とせざるを得ない。ところが、ハワイ英語においては、この規則がなく、今回の調査で録音した音声でも、“karate” [ka ˈɾa te]や“bakatare” [ba ka ˈta ɾe]のような発音がなされていることが確認できる。一方、標準日本語では長音として実現される“sensei”や“senbei”の語末音は、標準日本語のような[sense:]、[sembe:]ではなく、[sensei]、[sembei]が実現していた。これは西日本方言が関与している可能性も高い。

4. 8.　母音の無声化

標準日本語と同様、狭母音が無声化している単語もあれば、無声化していない単語もある。後者の例はたとえば、[ha na ˈku so]。強弱アクセントの位置が、無声化の妨げの要因になっていると考えられる。しかし、ストレスの置かれていない音節の場合、母音の無声化が起こる単語は少なくない。fukugi [fu̥ ˈku gi]（木の種類や）や fukusa [fu̥ ˈku sa]（袱紗寿司）は共に母音が無声化している。

一方、mekuso（目糞、目やに）や mimikuso（耳糞）は今回の録音調査では両方とも、明らかに無声化しない母音でそれぞれ[me ˈku so]と [mi mi ˈku so]になっている。日本語では、東京方言などでは母音の無声化が著しいが、ハワイ移民一世が多く話していた西日本諸方言においては、母音が無声化するとは限らない。平山(1992)は福岡方言を「無声化の目立つ方言」に含めているのに対し、広島方言と山口方言は「無声化の目立たない方言」に含めている。「無声化の目立つ方言」の話者と、「無声化の目立たない方言」の話者がそれぞれ移住した先のハワイでは、どちらの特徴が優勢になり、残ることも可能だっただろう。しかし、無声化が起こらないもう 1 つの言語である英語の存在により、無声化しないという特徴が優位に立った可能性が想定できる。

今回のインフォーマントにみられる母音の無声化の実態を考えると単語アクセント（ストレス）も関与していると思われるので、今後さらなる分析を行ないたい。

4.9. 促音の有無

借用元の日本語で促音が入っていた単語が、ハワイ英語でどのように発音されるかは、音韻論的条件によって異なる。具体的には、摩擦音の場合は促音のような「二重子音」が表れるが、破裂音の場合は促音と非促音の間で揺れがある。例えば、「バタバタしている様子」を表すオノマトペ gassagassa は[gas sa 'gas sa]となる。これは摩擦音の場合には子音が「引き伸ばされる」が、破裂音の場合には子音の開始時間が「遅れる」からである。つまり、摩擦音の促音の方が英語の音韻配列規則に馴染みやすい。英語で“put ten”や“pick cotton”のように破裂音の連続を丁寧に発音すると、[pʊt tɛn]などとなり、それぞれ1つ目の/t/や/k/の「開放」(release)が行われてしまう。これは、日本語の促音の発音とはかなり違う。一方、“miss seven”のように摩擦音の場合は、日本語の促音にかなり近い発音が聞かれる。

インフォーマントの Kent Sakoda に、二重子音のある表記 gassagassa と二重子音のない gasagasa の両方を提示し、その違いを尋ねたところ、基本的には同じであると答えた。しかし、その直後、よく考えてみると違うと訂正した。このことは、促音と非促音の違いを Sakoda がある程度知覚できるということと、両者には音韻論的には違いがないということを示唆していると考えられるのではないか。Sakoda はこの他にも、atta atta「あった、あった」、nappa「菜っ葉」、tekkamaki「鉄火巻き」などで日本語の促音のような発音を見せた。Sakoda が促音を発音できることには、Sakoda が日系人であることが強くかかわっていると考えられる。非日系人の発音では基本的に促音は実現せず、その影響を受けてか、表記からも二重子音が消えている例が複数見つかっている。

4.10. 母音長短の区別

標準日本語において、母音の長短は音韻論的に対立する。一方で英語の場合には、母音の質に音韻論的な対立（弛緩母音、緊張母音など）があり、継続時間は音韻論的に意味を持たない。では、日本語起源借用語が英語で発音されるとどうなるか。以下では、ロング他(2015)で挙げた例を報告し分析する。そこで既に扱った語の中には、関連する新情報が見つかったものもある。

まず、今回 baachan ['baa tʃan] と bachan ['ba tʃan]は明確に発音し分けられている録音を録ることができた。さらに、両者とも「後ろから 2 音節目」に強勢が置かれている。反対に aburage「油揚げ」は、日本語の「a bu ra a ge」における 3 拍目と 4 拍目が長音になるのではなく、融合して 1 音節化した結果、はっきりと 4 音節で[a bu 'ra ge]となっていた。この音韻論的認識が文字にも表れ、スーパーで見る商品表示にも「abrage」と記されている。

なお、長音を持つ obaachan[o 'baa tʃan]や ojiichan[o 'dʒii tʃan]と、長音を持たない obachan [o 'ba tʃan]、 ojichan[o 'dʒi tʃan]を今回の話者が音韻論的に区別していることが分かった。また、ozoni「お雑煮」、sato「砂糖」、shiitake「椎茸」はそれぞれ、日本語と同じ箇所に長音が認められた。yokan「羊羹」では長音が一切実現しておらず、反対に shoyu「醤油」では全ての母音が長音として実現していた。日本語では長音として実現するものが実現

していなかったり、日本語では長音でないものが長音として実現していたりと、様々な「話者内変異」が今回の話者に観察された。ただし、本稿３節で述べたように、非日系話者には「おばあちゃん」と「おばちゃん」の区別すら持っていない人が多くて、「話者間変異」もみられることが分かった。

5.　おわりに

以下の表３では、日本語の特徴が保たれている場合は、左の「日本語の特徴」と真中の「ハワイ英語 JOL の調査結果」の両方に網掛けをしている。英語の影響を一部でも受けている場合は、右の「一般米語で予想される発音」と「ハワイ英語 JOL の調査結果」の両方に網掛けをしている。

表３　ハワイ英語の JOL における日本語と英語の音韻論的特徴

	日本語の特徴	ハワイ英語 JOL の調査結果	一般米語で予想される発音
1.「フ」の子音	[ɸ]	[f]	[f]
2. ラ行子音	[ɾ]	[ɾ]	[ɹ]
3. ガ行子音の鼻音	[ŋ][g]	[g]	[g]
4. タ行子音の語中弾き音化	[t] [ka ɾa te]	[t]([ɾ]) [ka ɾa te][baɾa]	[ɾ] [kə ɹa ɾi][bʌɾə-]
5.「ツ」の発音と音節境界	[a.tsu.i]	[a.tsu.i]	[at.su.i]
6.「ブ」と「ボ」の混交	[kamaboko] [bōbura]([bōbora])	[kamabuko], ([kamaboko]) [bōbora]([bōbura])	英語による影響の有無が不明
7. 語末エ段母音の音配列規則による変化	[e] [ka ɾa te]	[e] [ka ɾa te]	[i] [kə ɹa ɾi]
8. 母音の無声化	あり、無し	無し	無し
9. 単語アクセント（高低か強弱か）	高低	強弱	強弱
10. モーラか音節構造か	モーラ	音節	音節

以上で、ハワイ英語の実態を考察して chicken skin（鳥肌）や go shishi（小便する）、ume（梅干し）、andangi（サーターアンダギー）のような単語はよそからハワイに移り住んだ人にも親しまれていることや、ハワイ英語と一般アメリカ英語との相違点はこうした語彙だけではなく、音韻体系にもあることが明らかになった。

付記

本研究はJSPS科研費基盤研究（B）15H05158「太平洋諸語日本語起源借用語逆引き辞典を作成するための現地調査研究」（研究代表者ダニエル・ロング）の助成を受けて行なわれたものである。We would like to thank Kent Sakoda, Ermile Hargrove and Kyle Sasaoka for their help with this research.

参考文献

朝日祥之・ダニエルロング (2011)「ハワイのプランテーションで作られた接触方言：オーラルヒストリー資料に見られるコイネー日本語」『日本語研究』31: 1-13 http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/tmu_j/archive31-40.html

島田めぐみ (2006)「ハワイの英語新聞に見られる日本語からの借用語」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ』57:115-123

島田めぐみ、高橋久子、本田正文 (2014)「ハワイにおける日本語語彙の共通語化」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ』65: 505-516

徳川宗賢、佐藤亮一編 (1989)『日本方言大辞典』小学館

国立国語研究所(1966年〜1974)『日本言語地図』大蔵省印刷局 https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/laj_map/

ハナシロ・チャド、島田めぐみ (2011)「ハワイにおける日本語語彙の認知に関する研究」世界日本語教育研究大会にて口頭発表、中国・天津

平山輝男編 (1992)『現代日本語方言大辞典』第1巻, 明治書院

ロング、ダニエル他(2015)「ハワイ英語で使われている日本語起源借用語」『日本語研究』 35: 139-152　　http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/tmu_j/archive31-40.html

Carr, Elizabeth Ball (1972) *Da Kine Talk: From Pidgin to Standard English in Hawaii*. Honolulu: University Press of Hawaii.

Densho Encyclopedia (2018) "Buddhahead 項". *Densho: The Japanese American Legacy Project.* Online at http://encyclopedia.densho.org/Buddhahead/.

Fukuda, Sachi (2004) *Pupus Plus*. Honolulu: Bess Press.

Fukuzawa, Seiji & Mie Hiramoto (2004) Chūgoku Dialect Terms that Remain in Hawaii Creole English. 『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部第53号：163-171.

Kimura, Yukiko (1988) Issei: Japanese immigrants of Hawaii. University of Hawaii Press.

Kubojiri, Clara (1955) "Shimpai Marriage An Outdated Custom?" *Nisei in Hawaii and the Pacific* Issue 9.

Kurashige, Kirk (2005) *Mmm-yoso!!!* Online at: https://mmm-yoso.typepad.com/.

Long, Daniel (2016) "Phonological traits of the Japanese and English spoken by Nikkei speakers in Hawaii" American Acoustical Society: Cross-Linguistic Speech Production and Perception. November 29, Honolulu, Hawaii.

Ogawa, Dennis M. (1978) *Kodomo No Tame Ni-For the Sake of the Children: The Japanese-American*

Experience in Hawaii. University of Hawaii Press.
Sakoda, Kent & Jeff Siegel (2003) *Pidgin Grammar — An Introduction to the Creole Language of Hawai'i*. Honolulu: Bess Press.
Simonson, Douglas, Ken Sakata & Pat Sasaki (1981) *Pidgin to da Max*. Honolulu: Bess Press.
Simonson, Douglas, Ken Sakata, Pat Sasaki & Todd Kurosawa (1992) *Pidgin to da Max Hana Hou*. Honolulu: Bess Press.
Tonouchi, Lee A. (2005) *Da Kine Dictionary.* Honolulu: Bess Press.
Trudgill, Peter (1986) *Dialects in Contact*. Oxford: Blackwell.

(Daniel Long・首都大学東京)
(たき　りゅういち・東京大学大学院修士課程)